

## 自己を愛するための社会的支援の重要性について

—自分はクズ、或いは、世界なんてクソツタレだと思いう生き辛い発達障害者のために—

立教大学大学院社会学研究科 田野綾人

### 1 目的

本報告は、なぜ発達障害者は「生きづらいのか」、より正確にいうならば、自分や周囲に対して負の感情を抱きやすいのかという切実な問題について検討するものである。なお、報告者も精神・発達障害を持つため、研究への関心・視点も障害者というパラダイムにあることは、あらかじめ断っておく。しかしながら、本報告は、社会学が持つ「普遍的な基準」によって問題を説明し、解決策を提案するものである。

### 2 方法

その方法として、医学や心理学、教育学、社会学、発達障害者が書いた手記などの文献を横断・学際的にアプローチする。そこから、発達・精神障害者が持ちうる「生きづらさ」について、論理的な記述が可能となるように、言説の考察・整理を行う。

### 3 結果・考察

その結果、障害者が「社会」という共同幻想を、アメリカの心理学者 Gordon W. Allport がいうような信仰一つまり、「基本的に或る目標(価値)の妥当性と到達可能性とを信じることである。目標は欲望によって仕組まれる(Allport 1953:149)」が難しくなっていることが確認できた。このため、障害者は自己実現へ向かうための妥当性や、その到達可能性が乏しくなっているために①「社会」への不信感を抱いてしまうことが、障害の社会モデルにおいても重視されてきたように、原因の一つとして整理することができた。

しかし、重要なもう一つの結果として、新たな傾向が明らかとなった。それは、発達障害者において、自己アイデンティティ構築やライフストーリーを持つことの不完全さ・難しさを示唆するものが顕著にみられたことである。これは、John Rawls が「合理的な人間であれば誰でもが欲すると推定される」(Rawls 1999=2010:86)「基本財」の中で、最も重要な「自尊(self-respect)」を著しく困難にすると考えられる。つまり、「おのれの人生計画は、遂行するに値するという揺るぎない確信」(同書:578)を傷つけ、「自分の能力の範囲内にある限り、おのれの意図が実現できるという自己に対する信頼」(同書)も困難にする。何故ならば自尊には、自己が<ある・語る>ことが前提にあるためである。そこで、報告者は発達障害者の「自己の格下げ」を止めるためにも、発達障害者とメタ認知の共同構築、つまり「自己物語」のプロットの作成を促進するような支援(例えば、ライフストーリー法を応用したようなセラピーなど)を、法的・社会的な手段・規模で(そして、いままでの社会モデルの限界を乗り越えるためにも)行う必要性を、発達障害者の自殺や二次障害の予防、破滅的な行動の減少などを期待して主張する。その結果、②自己を愛せないということ という問題に対して、その解決策の土台部分を作ることが期待できるだろう。

### 文献

Gordon Willard Allport, 1950 “*The Individual and His Religion: A Psychological Interpretation.*” Macmillan(=1953 原谷 達夫訳『個人と宗教』岩波書店)

John Rawls, 1999 “*A Theory of Justice(revised edition)*” Harvard University Press(=2010 川本隆史・福岡聡・神島裕子訳『正義論』紀伊國屋書店)